

渡良瀬プロジェクトの成果が 現れています！

特定非営利活動法人わたらせ未来基金 理事長
(渡良瀬遊水地コウノトリ・トキ定着推進協議会 会長) 青木草彦



■渡良瀬プロジェクトについて

渡良瀬プロジェクトは、支援者のGoogle Asia Pacific Pte. Ltd.からラムネットJが資金提供を受けて、連携主体の「渡良瀬遊水地コウノトリ・トキ定着推進協議会」(以下、定着推進協議会)が、渡良瀬遊水地とその周辺で絶滅危惧種コウノトリを含む地域の動植物の湿地生息地の保全に取り組んでいます。2025年でI期が終了し、2026年からII期目に入ります。



渡良瀬遊水地のコウノトリ (2025年12月)

具体的には3つの柱があります。第一は、湿地の重機によるメンテナンスです。放置すれば乾燥化やヤナギ類の繁茂により湿地特有の環境が失われるため、支援金を活用して草刈りや表土の浅い掘削を実施。地表に凹凸をつくることで水たまりや多様な微環境が生まれ、水生昆虫や小魚などが増え、

上位捕食者である鳥類の餌資源が豊かになります。第二は、水田ビオトープの整備です。周辺水田は鳥類の重要な採餌地ですが、中干しや冬の落水で生物が減少しやすくなります。そこで水路脇に通年湛水する「江」を設けたり、冬も水を張る「ふゆみずたんぼ」を推進したりすることで、ドジョウやカエルなどが通年生息できる環境を整え、農業と生物多様性の両立を図っています。第三は環境教育(CEPA)活動です。「渡良瀬遊水地 歴史・自然ガイドマップ」のリニューアルや写真展等の普及イベントを通じて、子どもや地域住民が遊水地の治水・利水・生態系の役割を学び、「自分たちの自然」を守る意識を育んでいます。



「ふゆみずたんぼ」で採餌するコウノトリの「ひかる」と「レイ」

このプロジェクトの大きなシンボルが、コウノトリです。かつて日本で一度絶滅したコウノトリが、野外に渡良瀬遊水地で繁殖して、大空を舞うようになっていました。2025年の冬には、渡良瀬プロジェクトでメンテナンスした湿地に20羽を超えるコウノトリが降り立ちました。まず、湿地の保全について説明します。環境学習フィールド3、大型鳥類休息実験地や湿潤環境形成実験地等の池の周辺を除草し、重機によ

るメンテナンスを実施して、失われた水面を再生しました。I期の目標面積は20haでしたが、30・79haをメンテナンスしました。メンテナンスして水辺のヨシやガマを除去した場所がクリークのようになって、2025年3月にはギンブナののっこみ(浅場への移動)、5月にはコイののっこみが確認できました。コウノトリは、メンテナンスをしている重機の周辺で採餌する様子も観察されました。メンテナンス後は、メンテナンスをした場所でのコウノトリの採餌が頻繁に観察されました。シギやチドリへの渡りの時期の初夏と秋には、メンテナンスして土砂を引きならして裸地になった場所で、シギやチドリが休息する姿を観察できました。

メンテナンスすることで、植物の遷移がリセットされ、攪乱依存種が発生しました。例えば、マルバノサワトウガラシ、タコノアシ、コイヌガラシ、ヒメシロアサザ、ミズマツバナなどが発生しました。また、イヌタヌキモの発生も見られました。このように、湿地のメンテナンスをすることで、コウノトリ以外の動植物

にとっても良好な環境を提供できることが確認されました。「ふゆみずたんぼ」では、定着しているペアである「ひかる」と「レイ」の採餌が確認されています。■渡良瀬遊水地コウノトリ・トキ定着推進協議会について 定着推進協議会の渡良瀬プロジェクト以外の活動についても紹介します。定着推進協議会は、地域住民や民間団体、行政機関等が連携して渡良瀬遊水地におけるコウノトリ・トキの野生復帰のよりよい在り方を検討し、コウノトリ・トキの個体保護や生息環境整備を実施することを目的としています。2025年は、①コウノトリ観察ガイド、②コウノトリのヒナの命名および命名式、③コウノトリに関する情報共有、④傷病個体への対応などを行いました。ここでは、コウノトリ観察ガイドについて紹介します。観察ガイドは、コウノトリのヒナの孵化(概ねヒナの巣立ちまでの土日)と祝祭日に行います。2025年は、観察ガイドを公募して20名が参加し、小山市生井のコウノトリ観察デッキで18日間実施しました。見学者は1日平均で144・5人でした。観察ガイドのアンケートでは、「たくさんの方がコウノトリを見て、幸せな気持ちで帰っていくこと」、「年々遠方からの訪問者が増えているように思う。また、訪問者のコウノトリへの関心の高まりを感じる」等、ポジティブな意見が多く寄せられました。

ラムサール20周年フェスタ

米子水鳥公園 館長
神谷 要



会場での子供たちの発表の様子



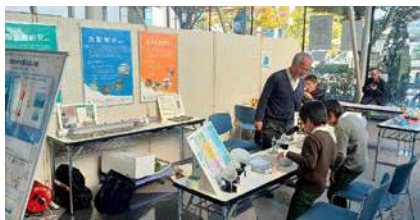
イベントでは島根・鳥取両県知事が肩を並べる

2025年11月16日、島根県松江市の松江テルサにおいて、島根県・鳥取県両知事を迎え、「中海・宍道湖ラムサール20周年フェスタ」が開催されました。本イベントは、中海・宍道湖のラムサール条約登録20周年を記念して両県が共同で企画したもので、地域の自然環境の価値を再確認し、次世代へ継承していくことを目的としています。

中海は日本で5番目の大きさを誇る汽水湖で、島根県と鳥取県にまたがっています。隣接する宍道湖は日本で7番目の大きさをもち、大橋川を通じて斐伊川水系として一つの流域を形成しています。どちらも

汽水湖ですが、下流にある中海の塩分濃度が高くなっています。この斐伊川水系には約40万人が暮らし、流域各自治体は毎年協力してさまざまな環境保全活動や交流事業を行っています。

特に島根県と鳥取県は、同一の水系を共有することから、ラムサール条約登録を契機に合同での取り組みを積極的に進めてきました。毎年6月の第2日曜日には、両県から約5千人が参加する中海・宍道湖一斉清掃が行われ、子どもラムサール交流事業や、湖の魅力を生かしたバイク&ランなど、多様な活動が展開されています。複数の都道府県にまたがるラムサールサイトは国内でも珍しく、両県が協力してイベントを実施する取り組みは、大型湖沼における先進的な事例として注目されています。



イベントでのブースの様子



伏谷さんと子どもラムサールクラブの発表の様子

今回の20周年記念事業も、両県の共催でした。会場1階では「中海・宍道湖ふれあいイベント」として、地域団体による特産品マルシェ、展示、体験ワークショップが行われました。中海の海藻を肥料として使ったお米で作るおむすびや、宍道湖産シジミ汁の提供もあり、多くの来場者が地域の恵みを味わいました。テルサホールではステージイベントが行われ、子どもたちによる学習成果の発表、

両県知事と子どもたちの対談、さらに松江出身でシジミ漁師の息子でもある「青山フォール勝ち」さんが所属するお笑いグループ「ネルソンス」によるトークコーナーなど、会場は終始にぎやかな雰囲気でした。

米子水鳥公園からは、中海周辺でふだんから自然について学んでいる小学生の「子どもラムサールクラブ」のメンバー5名と、卒業生を中心に構成される「Jr.レンジャークラブ」代表の伏谷太葉さん（高校3年生）が参加しました。伏谷さんは中海のラムサール登録後に生まれた世代で、子どもラムサールクラブ時代から10年以上にわたり米子水鳥公園で学び、ボランティア活動を通じてきた若者です。今回の節目の事業を通じて、次世代の確かな成長を感じるとともに、中海干拓・淡水化事業を経て守られてきた中海・宍道湖の自然を、これからも未来へ伝えていかなければならないと強く感じました。

沖縄本島東海岸におけるサンゴの冬季の異例な白化現象について

日本自然保護協会 自然のちから推進部/ラムネットJ理事 安部真理子

昨年10月から今年2月にかけて、沖縄本島東海岸の広範囲において、極めて異例な「冬季のサンゴ白化現象」が発生しています。通常、サンゴの白化は夏場の高水温によって褐虫藻が失われることで起こります。海水温が下がる冬期にこれほどの規模で白化が確認されるのは、記録上、類を見ない事態です。日本自然保護協会の調査では、うるま市の4地点、名護市大浦湾の2地点で多種多様なサンゴの白化を確認しました。さらに名護市天仁屋や金武湾レッドビーチでも、異なる水深で多くの種が白化していることが確認されています。

日本サンゴ礁学会の中野義勝会長は、「40年間沖縄の海に潜り続けていて初めてのこと」と、その異常さを指摘

しています。今回の現象で最も不可解な点は、被害が「沖縄本島の東海岸の一部」に限定されていることです。慶良間、久米島、石垣、西表といった沖縄の離島や、沖縄島西海岸、奄美群島の協力者からは、同様の報告は届いていません。一般に沖縄島の東海岸は西海岸よりも水温が2度ほど低いため、単純な高水温だけでは説明がつかない可能性が浮上しています。

被害は、造礁サンゴであるミドリイシ、コモンサンゴ、クサビライシ、ハマサンゴ、ハナヤサイサンゴから、八方サンゴのアオサンゴまで、極めて多くの種に及んでいます。水深もリーフ内の浅瀬から20mを超える深場まで、



白化したサンゴ (中野義勝さん撮影)

広範囲にわたっています。仮に陸域からの赤土流入や工事等の人為的影響であれば、発生源から離れるほど被害は軽減されるはずですが、今回は発生源から遠い場所でも広範囲に白化が確認されています。一方で、何らかの自然現象（海流の変化等）だとしても、沖縄島南部や西海岸、北部楚洲では一切見られないなど、範囲が限定的です。

12月という時期に、なぜこの特定エリアのみで発生しているのか。この不可思議な現象について、今後も注視し、原因究明を続けていく必要があります。

報告 第20回日韓NGO湿地フォーラム

ラムネットJ共同代表 永井光弘

2月28日から3月1日にかけて、韓国・ヨンチョン（漣川）において第20回日韓NGO湿地フォーラムが開催されました。ヨンチョン郡は、北朝鮮との国境の町で、区域の93%が軍事施設関連のため開発が制限されており、幸か不幸か豊かな自然が残されているところです。

今回のフォーラムの第1部は、イムジンガン（臨津江）とハンタンガン（漢灘江）という河川を中心にした地元湿地のラムサール条約登録を目指すヨンチョン郡の動きを後押しする内容でした。まず、東アジア・ラムサール地域センター（RRCIEA）所長のソ・スンオさんから、ラムサール条約の概要、体系的な湿地管理の重要性について平易な解説がありました。湿地管理の成功例として、自治体がNGOに業務委託した香港・マ

イポ湿地、台北・関渡湿地が紹介され、ぜひ訪れてみたいと思いましたが、ヨンチョン郡観光課のユ・ミオンさん、地元NGO「鳥と命の場」ペク・スンガンさんからは、ヨンチョンがユネスコの3つのカテゴリーの登録地であることや、ヨンチョンの水鳥（オオヒシクイ、マナヅル、タンチョウ、コウライアイサなど）が紹介されました。日本からは、2021年に湿地がラムサール登録され、2022年にラムサール条約湿地都市に認証された出水市から、オンライン参加でラムサール推進室の前田直子さんが報告されました。「鳥と共に生きる」という観点から、ラムサール湿地登録と出水の未来について語っていただき、ヨンチョンにも参考となったと思います。

第2部は、公共事業と湿地保全というタイトルで、多くの報告がされました。韓国側からは、チャン・ヨンチャンさん（オーシャン研究所）、ハン・ドンウクさん（エコリアPGA研究所）、チョン・インチョルさん（国立公園を守る市民の会）、オ・ギチュルさん（社会大改革委員会委員）から報告がありました。日本側からは、陣内隆之さん（公共事業改革市民会議）、菅波完さん（有明海漁民・市民ネットワーク）、安部真理子さん（海の生き物を守る会）から

報告がされました。止まらない公共事業による湿地破壊、事業評価の仕組みとその展望、昆明・モントリオール生物多様性枠組ターゲット3（30by30）達成のための努力などが語られました。詳細は、当日資料「公共事業と湿地保全」(<https://bit.ly/kealyg>)をご覧ください。

2日目は、朝からエクスカージョンに行きました。CCZ（民間人出入統制区域）に入り、韓国と北朝鮮の国境の様子や、そこで羽を休める多くの鳥たちを視察することができました。カメラは厳格に規制され、スマートフォンも写真機能がなくなるものはレンズにテープが貼られるとのことでした。そのため、日本人参加者はカメラもスマートフォンも持ち込みませんでした（ただ、韓国の人は平気でスマホにより記念写真を撮っていました）。

イムジンガン沿いに、ナベヅルやタンチョウ、ガンが100羽ほど混在して羽を休めていました。その他、多数のクロハゲワシが空を舞っており、コウライアイサも見ることができました。北を望む台風展望台では、38度線を挟んだ攻防が詳しく説明され、今も休戦中にすぎないという緊張感を感じました。

本当に素晴らしいフォーラムであり、準備していただいた関係者の方、特にKWNのキム・スンレさん、マ・ヨンウンさん、ハン・ドンウクさんに心から感謝します。

韓国における湿地の保全と開発

藤前干潟を守る会 西 亮憲

日韓湿地NGOフォーラムに引き続き、2026年3月1日〜4日に韓国各地の湿地を訪れました。

シファ湖

堤防建設によって水質が悪化したものの、海水の再導入や潮力発電の整備によって環境回復が進められてきました。開発によって深刻な環境問題が生じた地域でも、適切な対策と市民参加によって環境の回復が可能であることを学びました。重要なのは問題を前にして諦めない姿勢です。行政だけでなく市民や地域社会が関わり続けたことでシファ湖は再生へと向かい、地域社会の力強さを感じました。

セマングム

全長約12kmの防潮堤によって海域を閉め切った世界最大級の干拓事業です。韓国の公共事業の規模の大きさが日本と比べて桁違いでその大胆さにダイナミックさを感じました。一方で、土地利用や水管理の方針が

曖昧な巨大開発であることに違和感を覚えました。シファ湖とセマングムはいずれも大規模な沿岸開発ですが、環境再生が進んだ場所と、今も開発と保全の方向性が模索されている場所という対照的な姿のように感じています。

ナクトンガン

韓国最長の河川で、河口部では新空港建設計画も進められています。ここでも公共事業の規模の大きさを実感しました。また、藤前干潟をはるかに超えるスケールにも圧倒されました。日韓で開発や保全の対象となる規模が異なる背景には、地震など国土条件による都市構造や開発の制約の違いも関係しているのではないかと思います。環境保全と開発のあり方は、それぞれの国の自然条件や社会背景とも深く関わっているのだと感じました。

ご案内いただいた方々の地域の湿地に対する誇り、価値を守ろうとする姿勢に深く心を打たれました。また、日韓で20回にわたりフォーラムが開催され、湿地保全という共通目標のもと交流が続いていることにも感動しました。貴重な機会をいただきましたラムネットJの皆さま、そして韓国の皆さまに心より感謝申し上げます。



今回のフォーラムの会場参加者



CCZ内のナベヅルとタンチョウ



シファ湖



セマングム



ナクトンガン

*この記事の詳細版が以下のURLにあります。
<https://ramnet-j.org/report/1412>

●高梁川河口視察ツアー 岡山県倉敷市の高梁川河口干潟と人工島の2か所を巡り、野鳥を観察し、地域の未来を語り合う「渡り鳥と干潟から考える地域の未来」河口干潟と人工島二つの景色を見て話そう」が5月10日(日)10時から開催されます。たまたま干潟と鳥の会の主催、ラムネットJなど共催。小学生以上定員30名先着順。申し込み・問い合わせ… tamashima.higata@gmail.com

久米島プロジェクトの
成果報告会を開催しました

ラムネットJが実施している久米島プロジェクトの2025年度成果報告会が、3月15日、沖縄県久米島町のイーブ情報プラザで行われました。スポンサーのパタゴニア、プロ

ジェクトに関わったホテル館、久米島漁協、そして久米島町副町長も参加しての開催でした。

2024年に久米島町は「ホテルとサングの島」宣言を発表し、この行動計画の中でラムネットJと協力しての自然共生サイト登録や環境教育の強化等をうたっています。2025年度は登録区域を決める段階まで進み、休日に子どもを募集していた「赤土調査」も小学校の授業として実施されました。また、これまでの「環境DNA調査」「リーフチェック」「田んぼの生き物調査」に加え、高校生による「聞き書き」や「渡り鳥の調査・講演会」もスタート。多くの島民に知ってもらうために2026年度は「産業まつり」で活動を紹介することになりました。



諫早湾の閉め切りから29年
「干潟を守る日」シンポジウム

湿地のグリーンウェイブ2026に参加イベントとして、「諫早湾シンポジウム ウナギの棲める本明川へ」(「干潟を守る日」2026 in 諫早実行委員会主催)が、4月4日に長崎県諫早市の諫早市民センターで開催されました。漁業者の平方宣清さんが漁獲量の減少が続く有明海の現状と再生への期待、弁護士堀良一さんが諫早湾干拓問題解決の展望などを報告し、有明海漁民・市民ネットワークの菅波完さん(写真)が諫早湾調整池の水質改善と防災強化のために現状より水位を下げる形で海水を導入する新しい提案を行いました。



水のつながり、命のつながり。

湿地のグリーンウェイブ2026



「グリーンウェイブ」は、生物多様性条約事務局の呼びかけによって始まった、生物多様性の向上を目的とする国際的なキャンペーンです。この取り組みを湿地にも広げるために、ラムネットJでは毎年、5月22日の「国際生物多様性の日」を中心とした数カ月間、湿地保全キャンペーン「湿地のグリーンウェイブ」を、登録団体を募って展開しています。

今年も「湿地のグリーンウェイブ2026」として、4月から7月にかけて、自然観察会、田植え、清掃活動、外来生物の駆除、学習会など、湿地保全に関連した登録団体のイベントが全国各地で行われます。

ラムネットJでは登録団体の活動紹介やラムサール条約湿地自治体認証に関する記事などを掲載した2026年版のリーフレットを作成中です。湿地のグリーンウェイブの最新情報は、右のQRコードまたは以下のURLのウェブサイトをご覧ください。
<https://www.ramnet-j.org/wgw>



2026年度ラムネットJ会費納入のお願い

ラムネットJは4月から新年度となります。会員の皆さまには、このニュースレターに同封して郵便振替用紙をお送りしましたので、2026年度の年会費の納入をお願いします。会員や会費に関する詳細は下の「会員募集」案内をご覧ください。

クレジットカードでのお支払いをご希望の方は、右のQRコードまたは以下のURLから決済サイトのSyncableをご利用ください。



<https://syncable.biz/associate/RamnetJ>

Syncableに登録済みの方は、毎年4月1日に自動更新、カード決済となりますので郵便振替用紙はお送りしておりません。どうぞよろしくお願いいたします。

ラムサール・ネットワーク日本 会員募集!!

ラムサール・ネットワーク日本(ラムネットJ)の活動は、会員の皆様からの会費や、カンパ、助成金などでまかっています。ぜひ、ラムネットJのサポーター(一般賛助会員)になって会の活動を支援してください。もっと積極的に湿地保護にかかわりたい方は、会の運営や活動を担う一般正会員としての入会をお待ちしています。そのほか、団体や企業としての入会も可能です。詳しくは事務局までお問い合わせください。

会員の特典

機関誌「ラムネットJニュースレター」を送付するほか、会員限定のメーリングリストに参加できます。ラムネットJが主催する催しの参加費が割引になる場合もあります。

入会申込方法

●郵便振替 郵便振替用紙(払込取扱票)の通信欄に、ご希望の会員種別、お名前、住所、電話番号、Eメールアドレスをご記入の上、年会費をお振り込みください。一般銀行から振り込む場合は(払込取扱票への記入ができませんので)振り込み後に上記の申込事項をEメール、FAX、郵便等で右記の事務局までお知らせください。

●ウェブサイト 一般賛助会員、一般正会員については、ウェブサイトからオンラインでの入会も可能です。<https://www.ramnet-j.org/join/>にアクセスし、「入会申込フォーム」に記入して送信してください。年会費は郵便振替でご送金いただくか、オンライン決済サイトSyncable(シンカブル)からクレジットカードで送金することも可能です。

振込先

ゆうちょ銀行 振替口座 00140-0-765702 ラムサール・ネットワーク日本(一般銀行から) ゆうちょ銀行 〇一九(ゼロイチキョウ)店
当座預金 0765702 ラムサール ネットワークニホン

会員種別と入会申込金(年会費)

会員種別	正会員		賛助会員	
	総会での議決権があります		総会での議決権がありません	
一般	1口	5,000円	1口	2,000円
団体	1口	10,000円	1口	10,000円
特別	50,000円以上		30,000円以上	
企業	-		1口	100,000円

年会費(入会金)

年会費は毎年4月から翌年3月までの1年分です。入会初年度は、年度途中の入会でも入会金として1年分の会費をいただきます。2~3月に入会の場合、初年度の年会費(入会金)は無料となり、4月からの次年度の年会費としていただきます。

事務局

NPO法人 ラムサール・ネットワーク日本
〒110-0016 東京都台東区台東1-12-11
青木ビル3F TEL/FAX 03-3834-6566
Eメール info@ramnet-j.org